

夕刊文化

作家

北方 謙三

5

こころの玉手箱

その時計を見た時、私は自分のために作られたものか、と思ったほどだった。大きなベースに、時計が

四つ埋めこんである。なんのためかわからない。必要なのはひとつだけだが、全部同じ時計なのだ。

車のシリンダーとピストンを模したもので、四つの丸はバルブというわけだった。4バルブを、イタリア語ではクアトロ・バルボレと言う。ベースの素材は世界的なブレイキーマカーのブレーキ板で、側面にはピストンリングの溝らしきものがついている。そんなことは、どうでも



文字盤が4つもある

夢を刻む時計

三つ目

よかった。私にとつては、日本時間の時計以外の、三つが大事だった。かつて旅し、もう一度訪れてみたいと思っている土地が、地球上に三カ所ある。その時間に、合わせたのである。

ひとつは、コートジボワール時間。ほんとはブルキナファソのだが、時差はない。アフリカによくある、部族的な問題と、宗教紛争、厄介な病気などで、行きにくい場所になった。二つ目は、タクラマカン時間。中国の新疆ウイグル自治区の砂漠で、旅行が不可能ではないが、少数民族問題で規制が多く、昔のよう

再訪したい地の時間にセット

は、ペルー・アンデス時間。四千メートルの高地にある、ケチュア族の小さな集落にもう一度行きたい。インカ帝国を作った部族なのに、スペイン侵攻で高地に追いやられた。プーノというのは、なにもないという意味で、彼らは自分たちが住んでいるところをそう言うが、心には豊かなものがあると感じた。歩いて登らなければならない、高度順応に時間がかかるようになった、という情ない事情で、行けなくなった。

三つの場所は、行きたいのに行けなくなったところなのだ。それでも、私は完全には諦めていない。政情はすぐに変って安定することもあるし、病気は克服されるし、たっぷり時間をかければ高度順応もする。

男は腕に、時間など巻くな、と嘯いている。夢を、巻くのである。それがたとえ見果てぬ夢であっても。

来週はセーレン会長の川田達男氏です。

挟間 美帆さん 巨匠モンク作品を編曲したアルバム

ジャズ作曲家として2012年にデビューし、米ニューヨークを拠点に活躍する31歳。昨夏の「東京JAZZ」ではジャズ生誕100周年記念ステーションの演出を任された成長株だ。

新作はオランダの名門と共演した「ザ・モンク・ラ・イヴ・アット・ビムハウス」。ジャズピアノの巨匠セロニアス・モンクの曲を編曲し、メトロポール・オーケストラ・ビッグバンドを指揮した。「リズムや和音をどこまで変えるか。編曲はそのさじ加減が勝負。モンクの曲は個性が強くて変えにくいけれど、自分のセンスを信じてやりました」

「編曲の仕事は様々な音楽に出合っって刺激を受けるチャンス。五木ひろしさんの演歌の編曲を手がけたこ

自分のセンス信じて勝負

ともあるんですよ」。しかし「編曲家としては広く浅く、作曲家としては狭く深くが信条。私のアイデンティティーは作曲にありま」と力を込める。作曲の最新成果として今月15日、東京オペラシティから委嘱された新曲を初演(佐渡裕指揮、東京フィル)した。

「私の曲は都会的で無機質なビル街を連想させるといわれます。青森の田舎育ちなんですけどね。クラシックを学びましたが、EDM(エレクトロニック・ダンス・ミュージック)世代で、パフォーミングのテクノポップが好き。自分の音楽への影響もあると思います」

音楽と視覚的な表現の融合に関心がある。「パフォーミングが好きなのも、ダンスと音楽が合っているから。私自身、バレエを習っていたから、その影響も大きいでしょうね。自分の音楽ができたなら、必ずミュージックビデオも作るようにしています」。幼いころの夢はNHKの大河ドラマの音楽を書くこと。「今でもやりたいと熱望しています」

